平成２３年１１月５日

第６回「どうする小学校英語」に参加して

せたな町立若松小学校
教頭　佐々木　朗

１．はじめに

私は、中学生、高校生の時はどちらかというと英語が得意であった。大学では教育心理を専攻した。教育心理と言っても内情はというと私の４年間はコンピュータの勉強一筋だった。そんなこともあって、パソコンだけは、若い者には負けないという自信は今でもある。教育心理は、副免（自分の専攻以外にも中学校・高等学校の専門教科のとる免許）が取れるということで、英語を取った。

もともと小学校の教員志望であったが、ひょんなことから中学校の英語教師を８年もやることになり、英語教育というものにも関心を持った。

そして、平成２３年度から小学校に外国語活動ということで、英語が入ってきた。現役の英語教師を離れてから１５年も経つので、英語の単語も聞き取りもだいぶ抜けてしまっている状態ではあるが、英語教師の端っくれとして、いくらかはリーダーシップを取っていくのも今の自分の立場であろうという気持ちもあり、特に小学校英語に関わる研修会には積極的に顔を出すようにしている。

ＳＥＥＫ（函館児童英語研究会）は、私の恩師（私が英語と出会うきっかけになった高月英語塾の高月晋先生、函館東高校時代の英語の先生である田中久先生）が関わっていることもあり、毎年研修会には参加している。

２．今回の研修会

⑴期日　平成２３年１１月３日(木)
⑵場所　函館市亀田福祉センター
⑶内容　聞く活動を大切にした外国語活動の授業設計
　近畿大学　田邊　義隆先生
⑷内容（一部レジュメから抜粋引用）

・最初はアイスブレーキング。隣の方も、前の方も知らない方だったが、名前の交換や「How are you?」、「Great」だけでも、結構その後仲良くお話ができた。今更ながら、ちょっとしたきっかけ作りにはアイスブレーキングは大切なことだと改めて感じた。

・我々は、学生時代に英語を勉強して、たくさんの単語を知っている。でも、知っているはずの単語が聞き取れない、文字にしないと、わかならいということがよくある。

この原因は何だろう。文字がないと不安になってしまうのである。
・よく英語のシャワーを浴びることが大切だと言われる。聞き続ける事も大切だた、お風呂のシャワーはただお湯が落ちていくだけという考えもあり、何を聞くのか、どう興味を持たせるのかが大切である。
・だから、英語のシャワーをという考えもあるが、外国語として教えていく場合には、効率性を考え、日本語をうまく使っていくことも大切である。
・理解を助けるための手だてとして①視覚資料(例:絵、実物)やジェスチャーなど、非言語情報の補助、②既習事項の活用(言語材料、背景知識)、③日本語の効果的な利用(目的の提示、理解確認)などが考えられる。また、聞く必然性のある状況作り、聞きたいと思わせる場面設定も大切である。
・聞く必然性として、単に日付や曜日を聞くだけではなく、修学旅行まであと何日あるかなどを取り入れる工夫も必要である。
・聞きたいと思わせる場面で、昨年の講習会であった子どもたちに身近なマクドナルドについて、国によってマクドナルドの中身がどうちがっていくのかなど、興味を持つような工夫が大切である。
・単元指導計画作成の手順
1) 指導到達目標の設定する
2) 題材を決める
3) 主要な活動を決める
4) 単語や表現を選定する
5) 国際理解や他教科との関連について検討する
6) 評価の観点、方法について検討する
・外国語活動の授業展開モデルと本日の研究授業
1)あいさつとウォームアップ①
2) 復習②
3) 新教材の導入(モデル対話等の提示)③
4) 新教材の反復練習(パタンプラクティスなど、歌やチャントも利用)④
5)展開(ゲーム・遊び)⑤←※体験・創作活動への橋渡し的活動
6) 体験・創作活動(コミュニケーション活動・自己表現活動)
7) まとめとあいさつ⑥
この後、実際の授業ＶＴＲを見ながら、授業の構築について説明を受けた。
・導入　挨拶で日付を聞き、修学旅行までの日数を尋ねる（日付を聞く必然性）
・日課カルタ　get up , go to school , clean the classroom ,have school lunch , go home ,
go to bed などの日課カルタを机の上に並べる。ゲームは３～４人で１グループ。先生が読み札を読む。「I get up at six」児童は札を取り、自分の起きた時刻で答える。ただ、取るだけではなく、自分の日課を考え、発音することになる。これは、使えそうである。
・授業をした担任の先生は、年配ということであったが、見るからに若々しそうで、研究授業も積極的に受けている。英語は専門ではないが、田邊先生と何回か組むうちに、自分が積極的にやって後輩に見せ、教員を育成したいと考えているそうだ。すばらしいと思った。

３．感想
　どの授業でもそうだろうが、「何を教えるのか」と「どうやって教えるのか」ということを明確にしなければならない。特に小

学校英語の場合、教わる内容の必然性が伝わるような授業の流れ（教え方）を工夫しなければならない。月の名前を指導するにも、カードを出して繰り返し覚えるだけではつまらなく、それぞれの月の外国並びに日本の文化などと絡み合わせると楽しく覚えられる。また、カルタや神経衰弱などのゲームはどのカテゴリーにおいても有効な教材となるであろう。

英語の授業をしていく場合には、提示する教材及び子どもたちが扱う教材（カードやワークシート）などが、授業の善し悪しを大きく決めるであろう。教材作りは時間がかかるが、やり出すと楽しいものである。また、自分の作ったものは、自分の財産になるのである。

指導案の共有も大切なことだと思う。自分がかつてＡＬＴとやってきた指導案は全て自分のホームページにアップした。教材は全てＡＬＴに寄贈した。自分が苦労してやってきたことを自分だけのものにしないで、自分のホームページや校内での共有、また、関係サークルなどで共有していくことが大切だと思う。お互いの指導案のいいところを取り入れながら切磋琢磨して英語指導者としてのスキルアップを図ることが大切である。

打ち合わせの時間について、私は田邊先生に質問した。「何曜日の何時間目」ときちんと決めておくことが大切である。「放課後時間を取って」ではいつまでもできない。授業をする先生とサポートしてくれる先生のコミュニケーションがとれていることが大切なのは言うまでもないことである。

町単位・管内単位で勉強する組織が必要ではないかと思う。町のＡＬＴ並びにＪ－ＡＬＴの使い方を検討、授業の構築の仕方の交流、外部指導者による研修など、我々の資質を高めていくためには、個々の努力には限界があるので、組織を作って、その中で研修していくことも大切かと思う。現在北部檜山で英語の指導者の研究会を組織しているが、そこを足がかりとしながら、もっと小学校の教員にも入ってもらい、一人でも二人でもリーダーシップを取って、小学校英語の指導に力を入れていってほしいと感じた。